
ケアが広げる宗教のフロンティア

『現代宗教 2015』編集委員会

本誌『現代宗教』は、数年続けて、宗教の社会的役割に注目してきた。宗教教団の内部にむけて、「救済」や「癒し」の活動を行うことにくわえ、宗教のなかにいない人々の苦しみのために、宗教はなにかできるのか、また広く社会を対象とした「救済」ということが宗教に可能だろうか、問いかけてきた。東日本大震災の被災者に手をさしのべようとする宗教を継続して注視し、また前号では「老いに向きあう宗教」を特集テーマとした。(http://www.iisr.jp/journal/journal2014/)

宗教を、社会にとってのある種の資源、すなわち〈ソーシャル・キャピタル〉とみる考え方がある。そのさい、特定の共同体内部の紐帯を強化する力には宗教はなりうるだろうが、これに加えて宗教がもっている、外部へと橋を架ける・手をさしのべる力をよりいっそう発現させられないかという期待がある。

社会に対して宗教ができること・すべきことを明確にすることで、まず宗教は資源として「見える」ようになる。いっぽうで、宗教にはできないこと、また他の専門家や他の集団に助けを求めたり協力し合ったりすることで、気づきや発見を宗教のなかにもそとにももたらすことができる。「究極の智慧」や「真理」を持つ上位の側として、他に一方的に教え諭すだけではなく、思い切って外部に助けを乞うたり発想を転換した

りする力になっていくのではないか。その資源を汲み出す回路の一つとして、今号では、「ケアが広げる宗教のフロンティア」を特集テーマとする。

巻頭の対談は、慶応義塾大学看護医療学部教授の加藤眞三氏と『教誨師』著者の堀川恵子氏にお聴きする。手をさしのべることに困難が伴う相手——死刑囚や、病人の家族や、依存症者など——の孤独、さらには手をさしのべる教誨師自身の孤独などが課題として明示され、そして手をさしのべるための具体的課題と方法——かつて行われていた「合同教誨」や患者会——が提案される。

藤岡論文「受刑者の贖罪と再生」も、受刑者の生育歴に遡る恨みや憎しみ、罪責感の内実や、どのようにして贖罪が可能になるのか、等の問いを、現代日本の更正施設に焦点を当てて考察する。犯罪者や依存症者など道徳的に「悪」と捉えられがちな相手は、「ケア」対象どころか排除や厳罰を与えるべき対象とみられがちだ。だが、彼らは実はしばしば虐待などの被害者でもあり、強い被害者意識に手当てしないままでは、加害者性の自覚の妨げになる。適切な「ケア」は加害者としての自身に気づかせ、困難な贖罪への一步を踏み出させうる。それでも、第一歩に過ぎないのであるが。

西出論文「宗教とケアを架橋するもの」は、宗教報道にながく関わり、また東日本大震災における宗教者の活動を追いかけた経験から、宗教とケアとを架橋するとしたらその担い手は若い世代と非専従者（副住職と在家）ではないか、と、实例を挙げて問いかける。

東日本大震災で大切な人を失った人々の体験や想いを受けとめる宗教者育成の動きを追った弓山論文『『臨床宗教師』運動と宗教系大学』は、異なる価値観を「ケア」で橋渡しするための宗教界レベルでの取り組みの複数比較⁽¹⁾。いっぽうチャプレンによる個々の「ケア」のレベルでも異なる価値観（ビリーフ）の対立は生じるが、それを脱構築することで、結果としてケアの与え手の燃え尽き防止にもつながっていく方法を小西論文『『異宗教間ケア』の原理と方法論』は提唱する。

認知症の患者からどのような能力が奪われてしまうかに気をとられ、

何がまだできるのかを私たちはつい見失いがちだ。また「スピリチュアルケア」を、何らかの知識（死生観など）の習得に限定してしまったり、認知症患者の「ケア」を受け止める能力には疑念を持ってしまうだろう。マッキンレー論文「スピリチュアル回想法」は、認知ではなく情動に焦点を当てた宗教儀式などを認知症患者が享受できると指摘するなど、残存する能力が少なからぬことに気づかせてくれる。

「継続特集 3.11後を拓く」も、防災や災害救援の観点から「ケア」につながっている。自衛隊と宗教という、ともに日本社会で疎まれ忌避されがちな存在の、東日本大震災での意外な活躍をどう理解できるかと問う自覚論文「宗教は次の災害にどう備えるか？」は、寺院の防災という課題にも目を開く。森論文「ミッション・インポッシブル3.11」は、牧使（牧師）の視点から「復興」の現状、「復興」のあるべき姿、信仰者がそこにどう関われるかを自問する。いっぽう、鈴木岩弓による「被災地における“祈りの場”の誕生」は、震災被災地区をしずかな視点でとらえる民俗誌である。大津波により壊滅的破壊をこうむった地区を望む地域の山が、それ自身津波ではげ山にされながら、なお残って広域・複数宗教の祈りの場とされていく様子が描かれる。大塚モスクに集うイスラーム教徒たちが震災救援をどのように経験したかを尋ねたロングインタビューは、イスラームの相互扶助観の紹介にもなっている（添えられた後日談も読みたい）。

学術動向の展望である伊藤論文「21世紀西ヨーロッパでの世俗化と再聖化」は主としてイギリスに焦点を当てた世俗化（「宗教離れ」）について報告するが、ここでも「ケア」は宗教を教育や福祉や看護や医療などの諸領域に手をさしのべさせる鍵になっている。

さてこのような本誌のもくろみ「ケアが広げる宗教のフロンティア」の「ケア」とはどのようなものか、最後にお話しておきたい。

「ケア」という語はとても多くの意味をもつ。日本語ではどちらかといえばポジティブな含意、受け手の心身に快ややすらぎやくつろぎをもたらすような、「手当て」や「世話」を想像させる。枝毛やシミやニキビ

が生じないようにする美容上の「手入れ」も「ケア」だ。

英語のcareを英英辞典で引いてみると、もう少し広い含意が見つかる。「注意」や「慎重さ」に加え、「関心」「気にかけること」さらには「気にすること」「心配」という語義もある。これらの語義が示すのは、「ケア」を提供する側の態度、そして心身の負担である。

「ケア」は基本的に「善」や「快」なるものと信じられてきたから、提供者の負担にみあう意義ある行為とみなされることが多い。「ケア」のある部分は、意義あることへの労苦をいとわない人々（宗教者含む）によって積極的に担われてきた。そのためにかえって、「悪」や「苦」と出会ってしまう矛盾は、黙って呑み込まれてしまっていたかもしれない。さらに実際には、「悪」「苦」を対象として手当てする「ケア」さえも必要ということがわかってきた。

医療・看護・福祉のみならず、教育やエコロジーとも関わる実践である「ケア」。その是非を問う根拠として、宗教的価値観のみに（「善」「快」の答えを）求めるのではなく、専門知と現場の感覚とにより開かれた価値観が求められるだろう。「ケア」の複雑さと対峙し、手をさしのべ助けを求めることで、宗教が自らのフロンティアを広げ、「悪」や「苦」を手当てするすべをも得ていくことができるだろう。そこから現代を生きる私たちは、信仰の有無を問わず、手を携えて現代の課題に取り組んでいくことができるのではないだろうか。

（文責 葛西 賢太）

注

-
- (1) 藤山みどり『『臨床宗教師』の可能性を社会のニーズから探る』（前編・後編）も参照されたい（<http://www.circam.jp/reports/02/detail/id=3177>および<http://www.circam.jp/reports/02/detail/id=3193>）。2012年時点での宗教系心理ケアワーカー養成プログラムも一覧できる。また、米国の臨床牧会教育 Clinical Pastoral Educationをもとにしたチャプレン養成プログラムが、臨床宗教師養成プログラムとも密接に連携して、上智大学グリーンケア研究所にて行われている。